THE BEATLES CONCERTO

ROSTAL & SCHAEFER / RON GOODWIN

THE ROYAL LIVERPOOL PHILHARMONIC ORCHESTRA

DAMPC
DOCD-0018

制作にあたって

DAM VIPメイトの皆様、日頃のご愛顧誠にありがとうございます。
平成元年の春を迎え、今年はポピュラー音楽界のみならず60年代音楽界全てに多大な影響を与え、1970年の解散後も幅広い年代から支持され続けている歴史的なグループ、ビートルズの作品を取りあげました。
このVIP CDは、5人目のビートルズといわれ、ビートルズ全てのレコーディングプロデューサーをつとめたジョージ・マーチンが制作した「ザ・ビートルズ・コンチェルト」を初めてCD化したものです。
内容は「イエスタディ」「ミッシェル」「サムシング」などなど、クラシックに編曲されたビートルズの名曲をロン・グッドウィンの指揮により、ビートルズ誕生の地のロイヤル・リヴァプールフィルハーモニー管弦楽団が演奏したもので、単なる歌のないイージーリスニング集に止どまらず、ジョージ・マーチンのビートルズとの長い創作活動による、曲に対する深い理解と、妥協を許さない音楽への厳しい姿勢がうかがえる、完成度の高い、感動あふれる作品に仕上がっています。
耳なれたビートルズの数々の名曲を本格的なフルオーケストラで楽しむこの「ザ・ビートルズ・コンチェルト」を気軽に楽しんでいただければ幸いです。
最後に、VIP CD制作にあたりまして東芝EMI㈱をはじめ関係各位に多大なご協力をいただきましたことを心からお礼申しあげます。

DAM推進委員会 DAMPC

THE BEATLES CONCERTO

ROSTAL & SCHAEFER　RON GOODWIN

THE ROYAL LIVERPOOL PHILHARMONIC ORCHESTRA

ザ・ビートルズ・コンチェルト

(レノン、マッカートニー曲 *ハリソン曲 ジョン・ラッター編曲)

第1楽章：マエストーソ～アレグロ・モデラート

1 シー・ラヴズ・ユー……0'51"
2 エリナー・リグビー……1'25"
3 イエスタデイ……2'28"
4 オール・マイ・ラヴィング/シー・ラヴズ・ユー～エリナー・リグビー……1'07"
5 ヘイ・ジュード～シー・ラヴズ・ユー 2'08"

第2楽章：アンダンテ・エスプレッシーヴォ

6 ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア……3'10"
7 サムシング*……2'08"
8 ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア……1'29"
9 サムシング*……0'48"

第3楽章：プレスト

10 キャント・バイ・ミー・ラヴ……1'43"
11 ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード……2'42"
12 キャント・バイ・ミー・ラヴ……2'11"
13 ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード……1'14"

シックス・ビートルズ・インプレッションズ

14 フール・オン・ザ・ヒル……5'09"
(レノン、マッカートニー曲 ジョン・ラッター編曲)
15 ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンド……2'25"
(レノン、マッカートニー曲 ロン・グッドウィン編曲)
16 ミッシェル……3'17"
(レノン、マッカートニー曲 ロン・グッドウィン編曲)
17 マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー……2'38"
(レノン、マッカートニー曲 ロン・グッドウィン編曲)
18 ヒア・カムズ・ザ・サン……3'27"
(ハリソン曲 ジョン・ラッター編曲)
19 ア・ハード・デイズ・ナイト……4'09"
(ビートルズがやってくるヤァ/ヤァ/ヤァ/)
(レノン、マッカートニー曲 ロン・グッドウィン編曲)

ピーター・ロスタル&ポール・シェーファー(ピアノ)
ロン・グッドウィン指揮
ロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団
プロデューサー: ジョージ・マーティン

このディスクによせて/ジョージ・マーティン(プロデューサー)

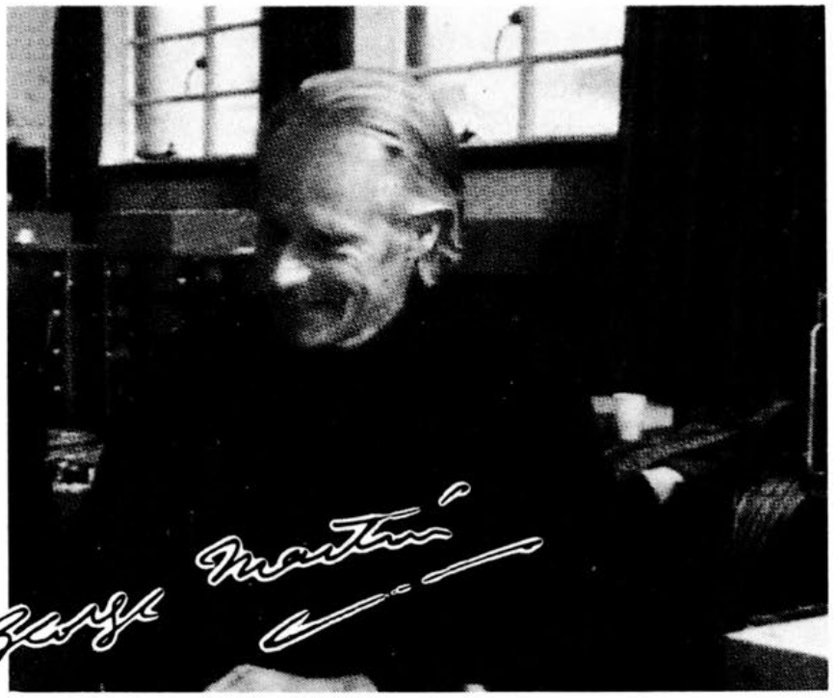
1960年代後半、イギリスのポピュラー音楽界では、多才な才能に恵まれた若い音楽家たちが、その創造力を存分に発揮して、史上稀にみる繁栄を築きました。

その突破口となったのが、云うまでもなく、1962年に登場したビートルズです。最初、ビートルズの出現という衝撃的事実を、どう受けとめたらいいものか、と戸惑っていた業界首脳も、ビートルズ音楽の持っている普遍的な美しさ、豊かなオリジナリティに気づいたのでした。

そして現在、精鋭ピアニストのピーター・ロスタルとポール・シェーファー、ジョン・ラッターの洗練されたアレンジ、私の年来の友人、ロン・グッドウィンの指揮するロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団、この三者の才能をここに結集することができたのは、喜ばしい限りです。

指揮者のロン・グッドウィンは私より1つ年下なのですが、数年前私がプロダクションを設立した際、真っ先に契約したレコーディング・プロデューサーです。彼のことは友人として、又、腕の立つ音楽家として、深く信頼しています。

グリーク、ラフマニノフあるいはチャイコフスキーの偉大なコンチェルトが好きな人はだれでもこの"The Beatles Concerto"を好きにならざるを得ないでしょう。これまでにも、ビートルズのヒット曲を数曲、お手軽につなぎ合わせた、という風な作品はありましたが、このビートルズ・コンチェルトはクラシック楽曲の形式にそって書かれた本格作品なのです。



"Beatles Impression"では、ジョン・ラッターとロン・グッドウィンがビートルズの原曲をネタにして変幻自在なヴァリエーションを織り上げています。二人の編曲者がどのようにビートルズを料理しているか、その辺も一聴に値します。

リヴァプールのキャヴァーン・クラブ※からフィルハーモニック・ホールまでは、実際、ほんの僅かな距離なのです。

※キャヴァーン・クラブはデビュー前後(1961〜62)のビートルズがレギュラー出演していたクラブ。

曲目解説　かまち潤

1960年代のポピュラー音楽界と若者文化に多大な影響を与えたビートルズが、その活動に終止符を打ったのが1970年。以来現在まで約19年間にわたり、その数々の音楽遺産とともにビートルズは伝説的なグループとして語り伝えられている。

昨年３月、ロンドンのテレビ番組に出演したジョージ・ハリスンが旧友のポール・マッカートニーやリンゴ・スターと共同で音楽創作活動を、と発言したことがきっかけでAP電はビートルズ再結成説を報じた。さらに６月、ポール・マッカートニーがソ連国内だけのレコード発売契約を同国のメロディアと結び、ビートルズ・ナンバーを含むロシア語バージョン・アルバム『Chobab CCCP』を10月に発売。この評判がすこぶるよく、ビートルズの新録作品や来露に関する問い合わせがソ連からポールのもとに殺到した。ペレストロイカの影響で、ソ連では今若者達の間ではタイム・スリップ、遅咲きビートルズ人気が沸騰という報が海外ニュースで伝えられていた。

そして９月にはビートルズ作品「イエスタディ」が500万枚セールス記録達成を記念して、アメリカのブロードキャスト・ミュージックから表彰された。さらに11月、リンゴ・スターがアルコール中毒治療中と伝えられるなど、ビートルズ及びその関連ニュースは未だマスコミ、ファンの関心をそそらずにはいられないものらしい。

こうした毎年恒例のように伝えられるビートルズ関係のニュースとともに、世代をこえたその音楽遺産もまた常にファンやミュージッシャンの興味のマトとして存在し続けている。「アンド・アイ・ラヴ・ハー」はエスター・フィリップス（65年）、「オール・マイ・ラヴィング」はホリーリッジ・ストリングス（64年）、「バック・イン・ザ・USSR」はビリー・ジョエル（87年）、「カム・トゥゲザー」はアイク＆ティナ・ターナー（70年）とエアロスミス（78年）、「デイトリッパー」はラムゼイ・ルイス（67年）とアン・マレー（75年）、「ゲット・バック」はビリー・プレストン（78年）、「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」はティファニー（88年）、「ミッシェル」はデビッド＆ジョナソンとバド・シャンクとビリー・ヴォーン（全て66年）、「サムシング」はシャーリー・バッシーとブッカー・ＴとMG's（共に70年）とジョニー・ロドリゲス（74年）、「涙の乗車券」はカーペンターズ（70年）、「イエスタディ」はレイ・チャールズ（67年）など、多数のビートルズ・カヴァー作品、ヒットが人気を集め、後を断たないことはそれを如実に証明している。

映画『第二次世界大戦』（76年）や『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』（78年）の音楽からムード・ミュージックのパーシー・フェイス、ビリー・ヴォーン、ホリーリッジ・ストリングスなどに至るまで広範囲にビートルズ・ミュージックは演奏されている。

そしてここに紹介する『ザ・ビートルズ・コンチ

▲ロン・グッドウィンとジョージ・マーティン

ェルト』と題された作品もビートルズ音楽をもとにした独創的な企画ものである。ピーター・ロスタルとポール・シェーファーのピアノをフューチャー、ロン・グッドウィン指揮ロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団の演奏によるクラッシックに編曲されたビートルズ音楽、そのユニークな視点とともに耳に馴染んでいたジョン、ポール、ジョージ、リンゴ作品が新たな生命力を吹き込まれて甦えるさまは興味深くもあり、また新鮮な感動を数多くの音楽ファンに与えるだろう。

ビートルズに５人目のメンバー

●もう１人のジョージ

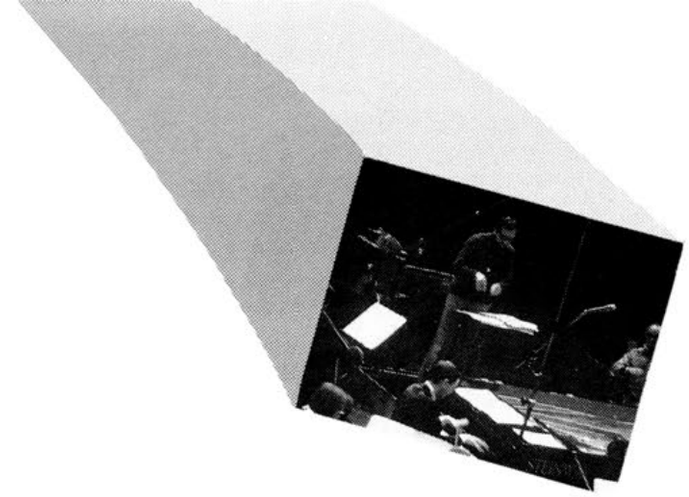
この作品は1978年、ビートルズ誕生の地、イギリスのリヴァプール・フィルハーモニック・ホールでレコーディングされた。アルバム・プロデュースはジョージ・マーティンが担当している。

ジョージ・マーティンは67年に急逝したマネージャーのブライアン・エプスタインと共にビートルズ音楽を語る時には欠かせない人物である。単なるレコーディング・プロデューサーというばかりでなく、ビートルズ音楽の出発〜発展〜終結に全て立ち会い、彼らのよき理解者、アドバイザーとして活動を共にした。いわばビートルズ５人目のメンバー、影のビートルである。

彼は1926年１月３日ロンドンで生まれ、ガイルドホール音楽学校に学び、1950年代後半EMIに入社、同社系列レーベル、パーロフォンのヘッド・プロデューサーとして活動を始めた。ビートルズと出会うまではポップ・バラード歌手を中心に、ピーター・セラーズ、マット・モンロー、シャーリー・バッシーなどのアーティスツを手がけている。

そして1962年彼はビートルズと歴史的な出会いをするわけだが、それまでにはブライアン・エプスタインによればいくつもの困難な障害があった。

ビートルズがイギリス国内で初のレコーディング・オーディションを受けたのは1962年１月１日、英デッカ・レコードである。この初オーディションに失敗、以後主なレコード会社に売り込まれたが結果は同じ、パーロフォンの親会社EMIもビートルズ



には全く興味をもっていなかった。

がしかし、思いがけないところからビートルズとジョージ・マーティンの出会いは実現した。エプスタインが英デッカ・オーディションで録音したビートルズ作品をプロモーション用レコードに、と考えたことが発端だった。プロモーション・ディスクを制作した録音技師がまずビートルズの演奏を気に入った。そして彼は同じビル2階の音楽出版社、シド・コールマンに彼らの作品を聞かせた。シドも技師同様、ビートルズの音楽に強い関心を抱き、友人のパーロフォン・レコードのプロデューサー、ジョージ・マーティンに彼らのことが伝えられたのである。

こうして62年6月ビートルズとジョージ・マーティンの出会いが実現、それは彼らにとって二度目、EMIでは初のレコーディング・オーディションだった。約1ヶ月後、マーティンはビートルズとの正式契約を交わした。だが後に明かされた話では、マーティンは当初クリフ・リチャードのような有望なポップ歌手を発掘する一手段としてビートルズのオーディションを認めたということだった。しかし、現実は思惑とは異なった。

でもジョージ・マーティンの対応はいかなる場合でも冷静で慎重だった。ビートルズのデビュー・レコード「ラヴ・ミー・ドゥ」がレコーディングされた時からそうだった。新メンバーのドラマー、リンゴの演奏をこの時初めて聞かされる（オーディションはピート・ベスト）マーティンは、万一に備えもう1人の信頼できるドラマーを依頼していたほどである。

またジョージ・マーティンはビートルズの可能性は認めていたものの、こと音楽に対しては当初から厳しく、決して妥協はしなかった。デビュー曲「ラヴ・ミー・ドゥ」にしても満足できるまでは何度でも演奏させ、17回目でようやくOKをだしている。

セカンド・シングルの件でもビートルズ側の要求はスムーズに認めなかった。あくまでもオリジナル楽曲のレコーディングにこだわる彼らに対して、ジョージ・マーティンはミッチ・マレー作の「恋のテクニック（How Do You Do It）」を歌う指示をした。

この案はビートルズ側の強引さと才能が結局マーティンを十分に納得させることになった。ビートル

▼レコーディング・セッション風景

ズ幻のセカンド・シングル曲になった「恋のテクニック」は彼らと同郷、リヴァプールのジェリー＆ペースメイカーズのデビュー（63年）曲となり、大ヒットを記録した。ビートルズも「プリーズ・プリーズ・ミー」でイギリス国内での人気を決定付けたのである。

ジョージ・マーティンは63年３月22日、イギリスで発売されたファースト・アルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』から70年５月８日発表の『レット・イット・ビー』まで、全作品のＡ＆Ｒマンとして名を連ね、英ポピュラー音楽界最高のプロデューサーになった。

彼のこの功績に対して一時、幸運だったという世間の中傷や妬みがささやかれたことがある。ビートルズもマーティンもこのことにはキッパリと否定の意を表明した。それは両者の長い創作活動において、ミュージッシャンとプロデューサーという個々の立場を超越した信頼感と数多くの役割が、ビートルズの栄光の裏に秘められていることを彼らは十分に理解、認めあっていたからに他ならない。

実際マーティンはセッション・ミュージシャンとしても数多くのビートルズ作品のレコーディングにも参加している。「ペニー・レイン」、「マネー」、「ビートルズがやって来るヤア！ヤア！ヤア！」、「ベイビー・イッツ・ユー」などではピアノ、「イン・マイ・ライフ」ではハープシコード、「サン・キング」ではオルガンをプレイしている。

斬新な音を作り出したグループ後期の「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」や「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」はプロデューサー、マーティンの技術なしには成しえなかったものである。

しかしマーティンはビートルズに関してこうも述べている。彼らは経験がなかったため初めはなにかと手助けが必要だった。でも時間を追って彼らはその才能を開花、私のアドバイスはそれほど必要ではなくなった。彼らの創作活動に適度なブレーキをかける、コントロールすることが私の役割だった。

マーティンは65年EMIを去り、フリー・プロデューサーとしてアソシェーテッド・インディペンデント・レコーディングス（AIR）を設立した。マーティンのこのEMIスタッフ・プロデューサーからフリーへの転進は、大冒険でもあったが、ビートルズとの絶対的な信頼関係を確認する意味でとても重要なことだった。EMIはマーティンの独立で別のビートルズ担当プロデューサーを予定したが、ビートルズ側が彼以外では認めなかった。こうして以後もマーティンとビートルズの関係は継続されたのである。

ビートルズ解散後のマーティンはフリー・プロデューサーとして、シー・トレイン、アメリカ、ジョン・マクラフリン、チープ・トリック、ニール・セダカ、ポール・マッカートニーなどのレコード制作を手がけている。

●曲目紹介

ビートルズ音楽はロックン・ロール、スキッフル、リズム＆ブルース、カントリー＆ウエスタン、ブルース、トラディショナル・フォーク、クラッシックなど、幅広いさまざまな要素をベースに、また臨機応変に吸収して作り出されている。

かって楽譜が読めない、書けないといわれたが、彼らはどんな多くのミュージシャンよりも聞く、という豊富な音楽体験をもっていたことがこのことからも伺える。そして音楽は理論や理屈ではないことを、身をもって多くの人々におしえてくれたことも忘れてはならない。

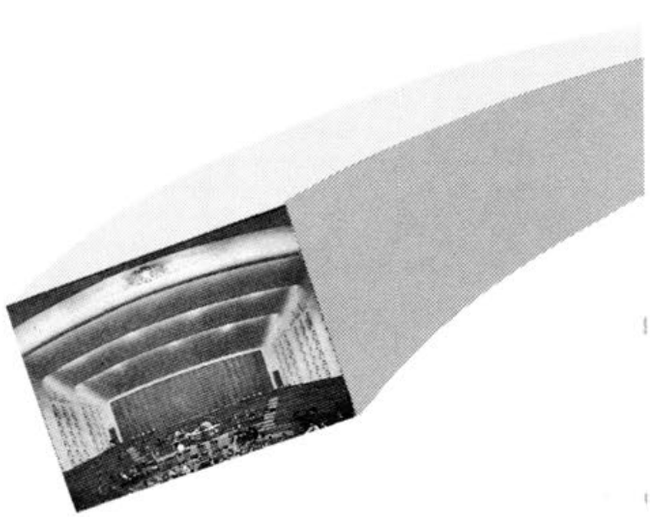
さて、本作品はそれらのビートルズ作品をクラッシックの視点、解釈にたってロン・グッドウィンとジョン・ラッターが編曲、新たなビートルズ音楽の可能性をひきだした前例のない独創的な企画である。原曲のもつ音のぬくもりをそこねずにクラシカルなサウンド処理をほどこすという試みは、過去幾度か発表されたクラッシック・ミュージシャンによるビートルズ作品演奏とも大いに異なった完成度の高いものである。

収録曲の前半が大きく三つの楽章に纏められているが、これは主にビートルズのシングル・ヒットを組曲形式に扱ったスケールの大きな演奏作品である。後半部はこれとは対照的に数多くが取りあげられ、ビートルズでこそヒットはしていないが大変ポピュラーな彼らの作品を、各々編曲を変え独立した形で演奏している。

▲レコーディング・セッション風景

オープニングの「第Ⅰ楽章：マエストーソ～アレグロ・モデラート」はハードなロックン・ロールの「シー・ラヴズ・ユー」と弦楽四重奏をベースにしたポップな「エリナー・リグビー」、スロー・バラードの「イエスタディ」と「ヘイ・ジュード」、Ｒ＆ＢとＲ＆Ｒをミックスした「オール・マイ・ラヴィング」と4タイプのビートルズ・ナンバーをひとつに纏めあげたかなり大胆な構成、編曲が必要とされる作品である。

ロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団のドラマチックな演奏をきっかけに、歯切れのよいピチカット・スタイルのピアノ演奏「エリナー・リグビー」がトップを飾る。続いてフルートや弦をピアノ演奏にからませたナイーヴな感覚の「イエス



タディ」に受け継がれる。そしてラストのピアノとオーケストレーションの壮大な演奏の競い合いはドラマチックそのものである。

「第2楽章：アンダンテ・エスプレッシーヴォ」はメロディを主にした同タイプのスロー・バラード「ヒア・ゼア・アンド・エブリホエア」と「サムシング」をモチーフにした作品である。流麗なオーケストラ演奏をバックに、変化にとんだピアノ演奏が時には強く激しく、また時にはうれいに満ちたメロディを歌いあげる。安らぎをたたえたナチュラルなビートルズ作品とは異なった味わい、変化があっておもしろい。

「第3楽章：プレスト」はアップ・テンポのロックン・ロール「キャント・バイ・ミー・ラヴ」とゆったりしたメロディのバラード「ロング・アンド・ワインディング・ロード」のコントラストを浮き彫りにした作品である。リズミックなピアノが変化にとんだメロディをはじき出す「キャント…」、弦とピアノのほのぼのとしたロマンティックな「ロング…」と起伏、バリエーションがひときわ輝き光る作品である。

後半部は「シックス・ビートルズ・インプレッションズ」とタイトルされ、そのトップを飾るのはボサ・ノヴァにも編曲されたことのある「フール・オン・ザ・ヒル」である。ここではビートルズ・ナンバーよりスロー・テンポで、メロディに視点をおいたピアノ演奏がポップ感をひきたてる。

「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンド」はダイナミックなオーケストレーションとシンプルなピアノ演奏がコミカルな味をひき出す、シンフォニックとワルツのかけあいのような作品。活気にみなぎったビートルズ・ナンバーとは対照的な静と動の魅力を展開した作品といえる。

「ミッシェル」はシンプルなギター伴奏を基調にしたビートルズ・オリジナルに対して、所々にオーケストラの重厚な演奏を挿入、ピアノの素朴なメロディにアクセントをつけた点がロン・グッドウィンの堅実な編曲の成果である。

「マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー」はビートルズ後期の作品である。1930〜40年代風な音楽を現代風に味つけしたといった感のビートルズ・オ

▼コントロール・ルームでのミーティング

愛蔵家 No. 001884

リジナル、陽気で風刺の精神も伺えるものである。これに対してこちらはピアノのコミカルな演奏と管楽器の織りなすラグタイム風な比較的シンプルで、コンパクトな纏まりのある作品に仕上げられている。オリジナルのもつ陽気さ、明るさを受け継いで軽妙な音のタッチを表現しようとしたことがこうしたラグタイム・ミュージックの楽しい演奏スタイルに結びついたわけである。

「ヒア・カムズ・ザ・サン」はジョージ・ハリスンの作である。カントリー、フォークの影響を受けた彼がフォーク・ロック・サウンドの延長線上に作りあげた「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス」とならぶビートルズ時代の傑作である。オリジナルは軽やかなアコースティック・ギターのつまびきと小ざっぱりしたポップなメロディが魅力的なナンバーだが、ここではギターに代ってピアノとフルートがその役割を演じ、ダイナミックなオーケストラが弾力性と力強さを表現している。

ラストの「ア・ハード・デイズ・ナイト（ビートルズがやって来るヤア！ヤア！ヤア！）」は64年公開ビートルズ主演第1作目映画の主題歌。大胆なギターのイントロ、ロックン・ロールをベースにしたハード感覚のサウンドがビートルズ・オリジナルである。

スローなブルース、ゴスペルの臭いをただよわせたイントロに幕を開け、ダイナミックなオーケストラが参加、二台のピアノの小気味よい響きともあいまって活気とスケールの大きいドラマチックなサウンドが聞きもの。

企画・制作：第一家庭電器株式会社
制作協力：株式会社 サンデュエット
デザイン：㈱グラパー企画
製　　造：東芝EMI株式会社

DAM PC
DOCD-0018